

ロマンスカーの旅



イラスト・岡林玲生

何度か引越しはしたが、生まれてからいままですと、小田急線沿線に住んでいる。「電車」と言われれば車体に青いラインが入った小田急線が思い浮かぶし、「特急」と言われれば「ロマンスカー」で決まりだ。

ロマンスカーで車内販売しているレモンスカッシュほど、おいしい飲み物はない。子どものころ、そう思っていた。銀の台座と取っ手がついた、ガラスのコップ。爽やかな甘さの薄黄色の液体は、小田原の祖母の家に行くときだけ味わえる、特別なものだった。

新宿から小田原までは、ロマンスカーに乗るとあつというまだ。「車内販売のお姉さん、早く来て！」と気を揉んだ。注文したレモンスカッシュが座席の

テーブルに置かれても、まだ安心はできない。はたして小田原到着までに、レモンスカッシュを全部飲み干せるか。おいしいから大事に味わいたいのに、時間も戦わなきゃならない。でも炭酸なので、そんなにゴクゴクとは飲めない。ああ、どうしたらいいのだ。

子ども時代の私はいつも、うれしい悩みに身もだえしつつ、レモンスカッシュに挑んでいた。スリルとジレンマがあったからこそ、ロマンスカーで飲むレモンスカッシュは、一層の輝きと旨味を帯びたのだろうか。

レモンスカッシュにばかり夢中になってもいけないのが、また悩ましかった。ロマンスカーが多摩川を渡るとき車窓の風景は、絶対に見逃してはならないの

である。

心なしか速度をゆるめ、車体が鉄橋を渡っていく。線路から伝わる響きが変わり、空が拓ける。家々の窓と屋根がどこまでも連なり、そのさきには遠く丹沢の山並みが見える。天気がいいと、富士山が見えることもある。窓に額をくっつけるようにして覗きこめば、眼下にはゆったりと光って流れる水。

「旅」の切なさや高揚感を、はじめて私に教えてくれたのはロマンスカーだ。大人になってからは、ロマンスカーはたまに特急料金を奮発して利用する「仕事の足」となった。レモンスカッシュも、そういう最近見かけない気がする。

だが、仕事の段取りを考えながら新宿に向かっているとき、「やれやれ、一日が

終わった」とぐったりしながら家を目指しているとき、ロマンスカーに乗って多摩川の鉄橋に差しかかったとたん、旅の途中であるような気持ちになる。記憶のなかのレモンスカッシュの味とともに、子どものころに感じた切なさや高揚がよみがえる。

ああ、そうだった、と私は思う。ロマンスカーは「仕事の足」なんかじゃない。かつては箱根への新婚旅行客を乗せ、いまは多くの通勤客を乗せ、でもロマンスカーはずっと変わらず、小田急線の線路を旅しつづけているのだ。

川を渡り、ここではないどこかへ、どれかの住む町へ、旅するロマンスカーがいつも私たちをつれていってくれる。

文・三浦しをん
Shion MIURA

東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。2000年、書下ろし長篇小説『格闘する者に〇』でデビュー。2006年、『まほろ駅前多田便利軒』で第135回直木賞を受賞。

小説に、『私が語りはじめた彼は』『むかしはなし』『風が強く吹いている』『きみはボラリス』『仏果を得ず』など。ウェブマガジンの連載をまとめた『夢のような幸福』『悶絶スパイラル』や『あやつられ文楽鑑賞』などのエッセイ集も人気を博している。

Boiled Eggs Online
http://www.boiledeggs.com